

生き生きと楽しく学び、自ら運動に取り組む児童の育成  
～家庭・学校・地域が一体となった取組を通して～

十島村立宝島小学校 教諭 志戸岡 直希

【推薦のポイント】

- 本論文は、体育科学習の単元の構成・学習の場・掲示物・人材活用等の工夫、「体力アップ！チャレンジかごしま」への挑戦、ICT機器の積極的な活用等、研究テーマに迫るために、総合的な視点から取り組まれた、価値ある論文です。
- 特にZoomを用いた遠隔授業の実践、タブレットの録画機能やロイロノートを活用した走り高跳び及びバスケットボールの実践については、体育学習における思考・判断・表現等を重視した場の構成であり、今後の体育科学習の参考になります。また、たからじまオリンピックの実践も、個々の運動への主体性や意欲の面で、大きな成果を収めたことがよく分かります。

目 次

1	研究主題	1
2	主題設定の理由	1
3	研究の仮説	2
4	研究の具体的な内容	3
5	研究の全体構想図	3
6	研究の実際	3
(1)	主体的活動において	3
ア	体育科学習の当番制	
イ	学習の流れの見直し	
ウ	掲示物の工夫	
エ	「体力アップ！チャレンジかごしま」の取組	
オ	スポーツ少年団の取組	
(2)	ICT機器活用において	6
ア	遠隔授業の導入	
イ	ロイロノートの導入	
(3)	地域・家庭との連携において	8
ア	地域人材の活用	
イ	家庭との連携	
7	研究の成果と課題	10
(1)	児童のアンケートより	10
(2)	成果と課題	10
○	参考文献	10

## 1 研究主題

生き生きと楽しく学び、自ら運動に取り組む児童の育成  
～家庭・学校・地域が一体となった取組を通して～

## 2 主題設定の理由

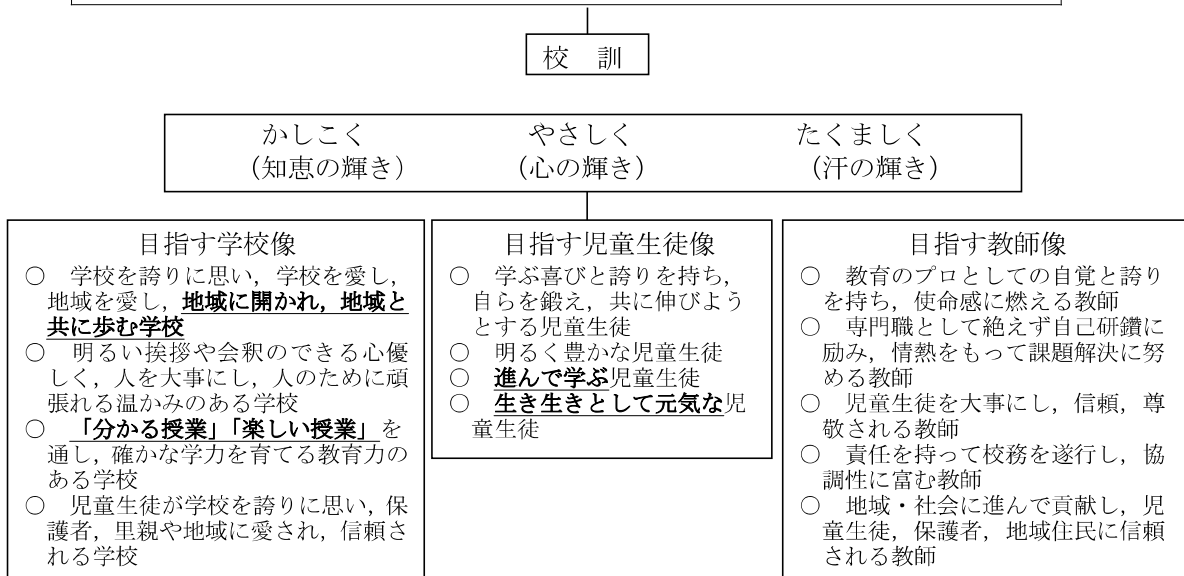
### (1) 「運動大好き“かごしまっ子”」育成推進事業について

鹿児島県では、「運動大好き“かごしまっ子”」育成推進事業に取り組んで2年目となった。この事業は、家庭・学校・地域が連携して「運動好きな子供を育てる」ことによって、生涯にわたって主体的に心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することができる児童生徒を育成するということを目的としている。

<b>家庭</b> 〈運動の日常化〉 ○ 外遊びの奨励 ○ 「家族でスポーツ」の実践 ○ 生活習慣（食習慣）等の確立	<b>学校</b> 〈運動への意欲・実践力の育成〉 ○ 教科体育の充実 ○ 教科外体育の充実 ○ 家庭や地域との連携 ○ 推進校による研究実践、授業公開	<b>地域</b> 〈運動機会の設定〉 ○ 体育的行事の推進 ○ 子ども会等での取組の推進 ○ 総合型地域スポーツクラブ（コミュニティスポーツクラブ）等での取組 ○ スポーツ推進委員による指導・助言
--	---	--

### (2) 学校教育目標から

学校教育目標：夢に向かって自ら学び、力を合わせ、安全に鍛え合う宝の子の育成



本実践では、特に、「地域に開かれ、地域と共に歩む学校」、「分かる授業・楽しい授業」、「進んで学ぶ」、「生き生きとして元気な」児童生徒の育成を目指した。

### (3) 学習指導要領から

体育科の目標及び内容に示されているように、その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全についての理解と、基本的な動きや技能を身に付けるようにする「**知識及び技能**」、運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う「**思考力、判断力、表現力等**」、運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う「**学びに向かう力、人間性等**」の資質・能力を示す三つの柱が相互に密接な関連をもつように、これらのことを体育科の学習活動に取り入れていかなければならない。

#### (4) 学校・児童生徒の実態から

本校は、小中併設の極小規模校であり、現在、小学生 15 人と中学生 8 人が在籍している。体育の学習は、運動会や駅伝大会などの大きな行事や朝の活動の体力タイムを除き、小中別で行われている。小学校の体育の学習は、1～6 学年まで合同で行い、指導は私が主で行っているが、各学級担任も一緒に授業に入り、T・T 形式によって授業を行っている。また、スポーツ少年団には小学生 15 人全員が入団し、毎週火曜日と金曜日の週 2 回バドミントンの練習に励んでいる。

昨年度は、本校に 1 人 1 台のタブレット端末が整備され、体育科の学習でも導入を図った。タブレット端末を導入する前は、ワークシート作成の準備時間の確保や児童が記入したワークシートの管理、学習の振り返り、学習の評価の仕方などが課題であった。そのため体育科学習にタブレット端末を導入して改善を図る取組を行った。最初は、動画サイトによる技の確認や、ロイロノート・スクール（以下ロイロノート）内でカードに学習の振り返りを書く活動から始めていった。ある程度児童が端末の操作に慣れてきたら、ロイロノート内でワークシートの学習カードを作成し、そのカードを使って学習を進めていった。また、走り幅跳びや跳び箱の学習では、自分や友達の動きを動画で撮影し、お互いに気付いたことを伝え合う活動を取り入れた。

このように、ロイロノートでワークシートを作成したり、児童が振り返りを書いたり、児童が撮影した動画を後で確認できたりすることで、学習の評価を詳細に行うことができるようになった。そのことで、児童の資質・能力を向上させ、深い学びへとつなげることができた。

以上のように、これまで教科体育や教科外体育において指導の工夫を図りながら実践を重ねてきたが、地域や家庭との連携に関しては、ほとんど行ってこなかったという実状がある。また、5 月の新体力テストを実施する際に取ったアンケートでは、ほとんどの児童が体育の授業を楽しいと回答しているが、体育以外の運動時間は 1 日平均 30 分未満の児童が大半であった。このような現状から、地域・家庭と連携して、自ら進んで運動する児童を育成するための取組が必要であると考えた。

#### (5) 研究主題について

先述した内容から、「生き生きと楽しく学び、自ら運動に取り組む児童の育成」には、学校だけでなく地域と家庭の三者が一体となって取り組む必要があると考えた。なお、本研究における「生き生きと楽しく学び」は、学習指導要領に基づき、教科体育や教科外体育、家庭における運動を通して楽しみながらも基本的な動きや技能を身に付けること、他者との対話や ICT 機器の活用による思考力・判断力・表現力等を向上させること、と定義した。また、「自ら運動に取り組む」は、運動大好き“かごしまっ子”育成推進事業や学校教育目標にあるように、自ら進んで運動を行うことで、運動が生活の一部になり豊かな人生を送ることができること、と定義した。

### 3 研究の仮説

#### (1) 仮説 1 【主体的活動】

児童が主体的に活動できるような手立てを講じることで、児童が自ら運動に取り組む態度を養うことができるのではないかと。

#### (2) 仮説 2 【ICT 機器の活用】

ICT 機器を活用して、他者とのつながりをもつことで運動を楽しんで行うことができるのではないかと。また、自分自身や他者の理解にもつながることで、学びを深めることができるのではないかと。

#### (3) 仮説 3 【地域・家庭との連携】

体育の学習や放課後、休日などにおいて地域や家庭と連携することで、児童が運動により親しみ、進んで体を動かすようになるのではないかと。

#### 4 研究の具体的な内容

##### (1) 【仮説1】における手立て

- ア 児童の自主性を高めるために、体育科の学習に当番制を導入する。
- イ 児童が主体的に活動できるように、単元の指導計画の見直しや工夫を図る。
- ウ これまでの学びが見えるように、掲示物の工夫を図る。
- エ 記録への挑戦や学級の一体感を育むために、「体力アップ！チャレンジかごしま」に積極的に取り組む。
- オ スポーツ少年団の活動を通して、自ら考え進んで運動に取り組む態度を育む。

##### (2) 【仮説2】における手立て

- ア 他校の児童と交流を図るために、体育科の学習に遠隔授業を導入する。
- イ 思考力・判断力・表現力等の向上のために、ロイロノートを導入する。

##### (3) 【仮説3】における手立て

- ア 体育科の学習において、地域の人材を積極的に活用する。
- イ 家庭に向けて体育科の学習の様子を伝えたり、家庭でも気軽に運動に取り組めたりできるように工夫を図る。

#### 5 研究の全体構想図



#### 6 研究の実際

##### (1) 主体的活動において

###### ア 体育科学習の当番制

本校では、それまで6年生が全て行ってきたことを、令和2年度より全学年が担えるように当番制を導入した。その目的は、自分たちで学習の準備を行うことで、自主的に学習を行っているという意識をもたせるためである。

当番グループの基本的な仕事は、①「道具の準備」②「準備運動」③「始まりのあいさつ」④「道具の設置や撤去」⑤「終わりのあいさつ」⑥「戸締りや消灯の最終確認」が主である。



写真1 当番グループの仕事の様子

様々な仕事を児童自身で行うことで、より主体的に学習に臨む態度を養うことができるのではないかと考え、令和2年度から継続して取り組んでいるところである。

体育 当番表

当番順  
6年→5年A→5年B→3・4年

当番グループがすること  
☆体育が始まる前にあいさつをする人を決めておきます。  
☆体育そうは、みんなでします。  
☆学芸後の戸じまりや電気、使った道具がかたづけられているかなどのかくにんをします。

学年	始まりのあいさつ	終わりのあいさつ
3/2 6年	たから	とから
3/6 5年A	としま	さんで
3/9 5年B	うみ	さかな
3/3 4年	はらう	とぞうお

資料1 体育の当番表

1・2年生は、上学年の動きを2学期までに覚え、3学期から当番グループに加わる。

イ 学習の流れの見直し

本校では、体育科の単元をA年度とB年度に分けて、隔年で指導計画を立てている。令和2年度に行った走り高跳びやバスケットボールなどの単元を今年度行うことになっていたのですが、児童がより主体的に活動し、生き生きと学習できるような内容にするために、実際の学習に入る前に見直しを行った。ここでは、見直しを行った単元のうち、走り高跳びの内容について詳しく説明する。

令和2年度の主な学習の流れ		令和4年度の主な学習の流れ	
1時	オリエンテーション	1時	オリエンテーション
	・走り高跳びについて知る。 ・跳び方や助走の仕方を知る。 ・自分の目標の高さを知る。		・走り高跳びについて知る。 ・動画を活用して跳び方や助走の仕方を知る。 ・自分の目標の高さを知る。
2〜5時	練習	2時	練習①
	・バーをゴムで代用して設置した場所と本来のバーを設置した場所の2か所の練習場所を設ける。 ・自分が練習したい場所を選んで練習を行う。 ・さらに高く跳ぶにはどうすればよいかを指導者と一緒に考える。		・ミニハードルや段ボールで作成したハードルを使ってリズムよく跳べるようになる。 ・ロイロノートを使って、学習の振り返りを行う。
6時	記録会	3時	練習②
	・全員、50cmの高さから挑戦していく。 ・高さを5cmずつ上げていく。		・段ボールハードルやハードルを使って、リズムよく、そしてより高く跳べるようになる。 ・遠隔授業を取り入れて、相互に練習を見合ったり、感想を伝え合ったりして他島の児童と交流を図る。 ・ロイロノートを使って、学習の振り返りを行う。
		4・5時	練習③
		6時	プレ大会
		7時	宝島オリンピック2022

見直し

今年度は、振り返りの時間を多く設定した。

自分の動きを客観的に見ることがとても大切。

本番の流れがつかめたり、本番に向けての意欲が高まったりする。

対話を用いた学習を行っていたが、児童主体ではなかった。

楽しんで記録に挑戦するというものではなく、体力テストのような自分の記録を測るだけの記録会だった。

資料2 令和2年度と令和4年度の走り高跳びの学習の流れ

第7時に実施する宝島オリンピック2022の詳細		
当日の流れ	ルール	目標
当日の流れ		
1 会場準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>跳べる高さは、自分の目標-15cmから</li> <li>跳ぶ高さを事前にエントリーする。</li> <li>同じ高さを2回連続失敗したら競技終了</li> <li>笛が鳴ってから5秒以内にスタート</li> <li>ミスした回数が合計3回になったら次の高さへのチャレンジはできない。</li> <li>最初にチャレンジする高さのみ、3回までチャレンジできる。</li> </ul>	目標+15cmで世界新記録
2 開会式		目標+10cmで日本新記録
3 練習		目標+5cmで県新記録
4 競技		目標クリアで金メダル
5 片付け		目標-5cmで銀メダル
6 閉会式		目標-10cmで銅メダル
会場の準備や片付け、開閉会式などは児童が中心となり、行う。	全学年で競技を行うので、時間内に終わるようにルールを工夫するとともに、全ての児童が全力を出して記録に挑戦できるようなルールにした。	練習中やプレ大会で目標をクリアする児童がいると考えられたので、目標を達成しても次の新たな目標をもてるように工夫を図った。

資料3 宝島オリンピック2022の詳細



ウ 掲示物の工夫

昨年度まで、体育科の掲示物は過去に入賞した「体力アップ!チャレンジかごしま」や島内一周駅伝大会などの賞状を掲示する程度であった。そこで、今年度からは、当該取組や体育学習の内容が視覚的に分かるように、掲示物の工夫を図ることにした。

(ア) 「体力アップ!チャレンジかごしま」の掲示物



(イ) 学習の掲示物



エ 「体力アップ!チャレンジかごしま」の取組

10人でチャレンジ	一輪車でGO	レッツ短縄跳び	2人でさっさっ
<p>朝の活動の「体力タイム」やスポーツ少年団の活動の補助運動で、定期的に様々な種目に挑戦させた。楽しく体を動かすことを目的として取り組んでいく中で、今年度「10人でチャレンジ」は前期のランキングにおいて県で5位に入ることができた。日々の取組が結果に表れたことで、児童の表情に喜びがあふれ、後期も楽しく運動をしていこうという意欲も更に高まったように感じた。</p>		馬跳びピョンピョン	のぼしてコロコロ

写真7 「体力アップ!チャレンジかごしま」に挑戦している様子





(イ) 十島村立諏訪之瀬島小学校との授業

バスケットボールの単元でZoomをつないで学習を行った。今回の遠隔授業は、両校の5・6年生だけでオンラインシュート対決を行った。中之島との授業と同様に、勝ち負けそのものよりも、楽しく交流を深めることをねらいとした。

一回戦		1	2	3	4	5	6	7	計	二回戦		1	2	3	4	5	6	7	計
	諏訪之瀬	○	×	×	×	×	×	○	2		宝	×	×	○	○	×	×	×	2
	宝	○	×	×	×	×	×	×	1		諏訪之瀬	×	×	×	×	×	○	○	2

表1 シュート対決を行ったときのスコア表

1・2回戦とも両校の力が拮抗し、最後までどちらが勝つか分からない展開が続いた。



シュートを打つたびに歓声が上がリ、楽しい時間を過ごすことができた。

じゃんけんで先攻・後攻を決め、交互にシュートを打っていった。

題名 諏訪之瀬島とのズーム  
 ○全員の5時間目の体育で諏訪之瀬島とズームをつないで授業をした。今日のゲームではシュート対決をした。諏訪之瀬島の友達として、も上手くて何回もシュートが決まっていたので、おどろいた。でも僕は百も入る事ができなかった。なのでこれからも練習をして上手くいければ良いと思った。みんな楽しんで取り組んでいたのが良かった。今回と同じようにまた他の島とズームをつないで授業をしたい。


写真10 諏訪之瀬島小との授業の様子

資料6 諏訪之瀬島小との授業後に書いた児童の日記より


イ ロイロノートの導入  
(ア) 走り高跳びの学習

資料7 ロイロノートにおける走り高跳びの学習記録

学習の流れを示しておくことで、児童全員が学習の見通しをもてる。



1人1台の端末があるので、自分で確認したいところを何度でも再生できる。



自分の跳び方を客観的に見ることで、自分の課題が明確になる。

授業後に振り返りを行う。記入後は、提出ボックスから提出する。指導者は、児童の振り返りを一元管理でき、児童も自分の振り返りをいつでも確認できる。

写真11 跳び方を動画で確認している様子

写真12 撮影した動画をグループで確認している様子

資料8 振り返りカード



(イ) バasketボールの学習

簡単なゲームを2回程度した後、ロイロノートの共有ノートを使って、どのようなルールを追加したらよいか話し合いを行った。今回は、ウェビングと座標軸のシンキングツールを使って、思考力を深める学習を行った。

資料9 ロイロノートを活用したBasketボールのルール作り

ウェビングを活用し、どんなルールがあるとよいか、思いつくアイデアをたくさん出していった。

座標軸のシンキングツールを使って、出たアイデアを整理した。実際に使うルールは、みんなが楽しめるように「楽しくて、簡単なルール」でゲームを行うことにした。

写真13 シンキングツール活用した話し合いの様子

(3) 地域・家庭との連携において

ア 地域人材の活用

昨年度までは、動画を活用したり指導者がお手本を見せたりして技術面の指導を行っていた。今年度は、学校教育目標にある「地域に開かれ、地域と共に歩む学校」を目指し、地域の方を学校に招待して児童と一緒に運動を行ったり、技術面の指導を行ったりする工夫を図った。

走り高跳び	バスケットボール	跳び箱
<p>今年度は、「走り高跳び」「バスケットボール」「跳び箱」の3つの単元で地域人材の活用を図った。このように地域の人材を活用することで、普段とは違う視点で学びを行うことができる。児童も運動を楽しみながら、程よい緊張感をもって学習に臨める。また、それぞれの単元に関して専門性をもった人材を活用することで、学びの質がより高まる。</p>		

写真14 地域の方との練習の様子

イ 家庭との連携

運動好きな児童を育てるには、家庭との連携が不可欠である。今年度は、学級通信とは別に「スポーツだより」を週に1回程度発行して、日々の体育の学習の様子を詳しく伝えたり、普段の学習の様子を参観できるように発表会を開催したりした。また、スポーツだよりで「家庭でできる簡単な運動」というコーナーを設けて、家庭で気軽に運動に取り組んでもらえるように工夫を図った。それと関連させて、文部科学省から出されている運動取組カードを活用して、児童の日頃の運動状況を把握する取組も行った。

(ア) スポーツだより

これまでは、学級通信の一部のコーナーで体育の学習の様子を家庭に伝えていたのですが、伝えられる情報に限りがあった。

「体力アップ！チャレンジかごしま」の取組内容や前期のランキング結果のお知らせなどをする。



資料 11 スポーツだより

先に「かごしま」のイラストと「チャレンジかごしま」のイラストを比較して、言葉の説明だけでは分かりにくいので、イラストを入れてやり方を説明した。

資料 10 イラストによる説明

運動取組カードの協力をお願いや体育の学習に必要な持ち物などを連絡する。

(イ) 宝島オリンピック 2022 の開催



開催の2週間前に家庭に案内し、児童の競技を見に来てもらえるようにしたところ、平日にもかかわらず、多くの保護者に参観してもらえた。児童が頑張って競技に臨む様子を見られて、保護者も嬉しそうだった。帰宅後に「すごいね。がんばったね。」と声をかけてもらい、「次の学習への意欲がでた」という内容の日記を書いている児童もいた。

写真 15 宝島オリンピック2022の様子

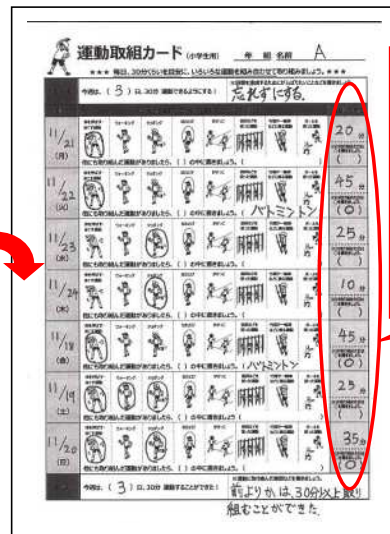
(ウ) 運動取組カード

カードに掲載されている運動メニューから選んで、運動に取り組むことができる。

自分自身で、1週間の取組の振り返りを行う。



資料 12 運動取組カード(1回目)



資料 13 運動取組カード(2回目)

家庭への呼びかけや運動に対する児童の意識の変化もあり、1日30分以上運動に取り組む日数が1回目の取組よりも増えた。

## 7 研究の成果と課題

### (1) 児童のアンケートより

12月15日(木)に調査を行った。調査対象は、1～6年生までの小学生15人全員に対して、ロイロノートで作成したアンケートを用いて、端末上で回答をさせた。

<b>1. 体育の学習は、楽しいですか。</b>
楽しい (93%) 楽しくない (0%) どちらでもない (7%)
<b>2. 1でそのように答えたのは、どうしてですか。</b>
・できなかった技ができるようになると楽しいから。(13%) ・勝ち負けがつくのが楽しいから。(7%) ・走ったり、鉄棒や跳び箱をしたりするのが好きだから。(33%) ・いろんな学年の友達と一緒に運動ができるから。(33%) ・他の学年と交流ができるし、体力も増えるから。(7%) ・たくさん練習して技ができるようになったときは楽しいが、できなかったときは楽しくないから。(7%)
<b>3. ペアやグループになって話し合いをするのは楽しいですか。</b>
楽しい (80%) 楽しくない (0%) どちらでもない (20%)
<b>4. 話し合いをしながらする練習と、一人で黙々と練習するのはどちらが上手になると思いますか。</b>
話し合いをしながらする練習 (100%) 一人で黙々と練習 (0%)
<b>5. 去年と比べて、自分から進んで運動をするようになりましたか。</b>
去年よりしている (80%) 去年よりしていない (0%) 変わらない (20%)
<b>6. これからも運動を続けたいと思いますか。</b>
続けたい (100%) 続けたくない (0%) どちらでもない (0%)
<b>7. 地域の方と一緒に運動をしたり、家の人に体育の学習を見てもらったりするとき、頑張ろうという気持ちになりますか。</b>
なる (80%) ならない (7%) どちらでもない (13%)

アンケートから、本研究における日々の実践の効果が少しずつ表れていることが分かる。楽しく学習できるように学習の流れや掲示物の工夫を図ったこと、他者とのつながりや学習を深めるために ICT 機器を活用したこと、運動に親しみ今後も進んで体を動かすようになるために、地域や家庭との連携を図ったことによって、「生き生きと楽しく学び、自ら運動に取り組む児童の育成」につながったと考えられる。

### (2) 成果と課題

#### 仮説1【主体的活動】について

- 様々な取組や活動の工夫を図ることで、自ら進んで練習に取り組む児童の様子が見られた。また、授業以外の時間に走り高跳びの練習をしたり、「チャレンジかごしまをしたい！」と言ったりする児童が増え、体を動かすことを楽しんでいる様子が見られた。
- △ 全学年で体育の学習を行っているので、各担任との連携が今以上に必要だと感じた。普段から児童の実態を把握するために、今後も情報交換を積極的に行っていききたい。

#### 仮説2【ICT機器の活用】について

- 体育の学習では初の試みであったが、Zoomの活用によって、普段接することのない他校の児童と交流を深めることができた。また、同じ時間に同じ内容の学習を共有することで、楽しく学習に臨むことができたようだった。運動が楽しいと感じてもらうように、今後も積極的に活用を図っていききたい。
- △ 体育の学習は、活動の範囲が広くて動く場面が他教科よりも多いので、カメラが一台のみだと全てを配信することができない。今後は、複数のカメラを用いて配信したり、ロイロノートとの併用で学習を行ったりすれば、これまでよりも学習の様子を伝えやすくなり充実した遠隔授業になると考えられる。

#### 仮説3【地域・家庭との連携】について

- スポーツだよりの発行によって、普段の体育や「体力アップ!チャレンジかごしま」の取組を家庭に詳しく伝えることができた。また、家庭でできる簡単な運動の紹介で、体育以外で体を動かす時間を増やすことができた。
- △ 今年度は、3人の地域の方を地域人材として活用することができたが、宝島は住人の入れ替わりが激しいので、毎年安定して体育学習の人材を確保できるかという点については、課題である。

### ○ 参考文献

小学校学習指導要領解説(体育編)	文部科学省	平成29年
「運動大好き“かごしまっ子”」育成推進事業	鹿児島県	令和3年
運動取組カード	文部科学省	